

2020 Spring Semester

Delicious Movement Final Project

トリニティからトリニティへ

作 林京子

構成・俳優 中尾幸志郎

撮影・観客 原涼音

「はじめに——舟を演じるということ」

I. Receive

『トリニティからトリニティへ』上演箇所

II. Deliver

逗子市立図書館——林京子の本が蔵書されている場所

逗子市桜山5丁目——林京子が住んでいた場所

茅ヶ崎市——林京子が眠っている場所

III. (Re)Receive

「弔う旅」 原涼音

「おわりに——『行く』ということの意味」



3



4



はじめに——舟を演じるということ

中尾幸志郎

この小冊子は、2020年度に東京大学で開講された授業「デリシャス・ムーブメント」の最終成果物（ファイナル・プロジェクト）として、受講生の中尾幸志郎が友人の原涼音の協力を得て制作したものです。

今年の春、武漢で発生したとされる新型コロナウイルス（COVID-19）は猛烈な勢いで世界各地に拡がり、多くの死者が出る一方で、幸い健康を維持できた人びとも多かれ少なかれ障害が発生しました。東京大学の学生や教員もその例外ではなく、キャンパス内が完全に封鎖された上で、全授業がZoomを用いたオンライン授業に移行されました。

わたしは昨年度の「デリシャス・ムーブメント」の受講生でした。そのときは、十人に満たない学生たちが学内のスタジオに集まり、永子さんとともに動き、考え、互いの意見を共有し合いました。そこでは、学術論文をゴールとする一般的な講義とは異なり、個人が自らの専門性を特化させることに重きが置かれるわけではありませんでした。むしろ努力が要されるのは、自分のからだを合理化された日常の所作から引き剥がし、何の目的もたずにただ動いてみることや、そうして得た感覚を自分の正確さからかけ離れないような仕方言葉にすることでした。

言葉の正確さというものは、一人の人間が一個のからだをもった存在として、他者の言葉やその存在に触れようとする意志から生まれます。意志とはつまり、〈しなくてもよいことをする〉ということへの心の働きです。それはクラスにおいては、右手の指と指のあいだを丁寧に探りながら、呼吸と、身体全身の摩訶不思議を感じとることだったり。Black Lives Matterに関する新聞記事を読み、思いおもいの意見を話して共有することだったり。クラスで読んだ作品から、覚えておきたい言葉を選び、人前で声に出してみることもだったりしました。

ムーブメントとは、必ずしも目に止まるような大きい動きのことではありません。たとえば、本を読むこと。読んだなかで自分にとって大事な箇所を選び、覚えること。それを声に出しながら、心の微細な動きを観察すること。これらはすべて、けっして容易には起こりえないムーブメントです。クラスで話題にされることは、人種差別、原爆、震災、死など、およそ人類全般に関わるような大きな問題でした。そういう掴みたい、容易に想像できないような大きな問題だからこそ、まずは細部を動くことからはじめなければならない。そして、細部を動くことは、必ずしも自分の身の丈に甘んじるということではありません。自らの意志の芽生えを感じ、すこしでも他者の存在に触れようと動きはじめること。その端緒をムーブメントと呼ぶこともできます。

わたしが再びこのクラスに参加したのは、ひとつには、そうでもしなければ出会わないような人たちと出会い、もういちど新しい経験としてクラスを受けてみたかったからです。もうひとつには、前回のクラスで林京子の著作を通して考えた「八月九日」のことを、一個の人間としてもう一步踏み込んで考えたかったからです。

莫大な数の人間たちが経験した、原子爆弾や放射能というあまりに人間的な脅威を、どのようにして受け取り、自分の生と関連づけることができるか。健康な肢体を謳歌して生きてきた一個の人間として、そこにどれほどの想像力を働かせることができるか。攻撃の姿勢をとる間もなく消された人びと、被爆に苦しみ悶えながら死へ向かっていった人びと、それでもなお自殺せずに生き残った人びと、そういう者たちの生と死を想うことができるか。

・・・

本に書かれた言葉というのは、いつも誰かに読まれたがっているものです。作者が歳をとりやがては死んでいくように、本も次第に人びとに読まれなくなり、か細い声で訴

える老衰体になっていく。それでも、本が誰かの手に渡り、その人の心と触れ合うようなことがあれば、いつでも言葉は活力を取り戻し、死者を弔うようにして生きている者とまた別の存在とを引き合わせる。そういう舟のような役割が、本の言葉にはあるように感じます。

わたしは林京子の言葉を、永子さんを介して受け取りました。永子さんも舟のような人です。彼女は「林さんのことを教えるために大学でインストラクターをやっているようなものだ」と言うのです。自らもひとりのアーティストでありながら、いや、長いことアーティストという仕事を経験してきた人だからこそ、友人である林京子の言葉を誰か別の人間に運び届けるという、舟の使命を負っているのかもしれない。

わたしはここ二年間、ひとりの舞台演出家として、演劇とはなにか、演劇にできることはなにかということを考え続けてきました。しかし今回、『トリニティからトリニティへ』を俳優として上演するにあたって、これまで以上に覚悟というものを必要としました。ひとりの俳優として、上演の枠組みを決め、旅程を組み、場所をえらび、観客を説得しました。ひとりの俳優が、ひとりしかない観客に向き合うとき、もはや小手先の技術などほとんど問題にはなりません。つねにあるのは、自分の選択ひとつで一日が台無しになるかもしれないという恐れ、観客に言葉をたしかに届けられているだろうかという不安、こんなことをして何処かで林京子に笑われてはいないだろうかという滑稽さ。もはや俳優という役割は、自分のすることへの言い訳としてはあまり役には立たず、一個の人間として、その場所に、その観客に対峙するしかないというような、覚悟のいる一日でした。

この穏やかでない経験のなかで、俳優というのは一隻の舟を演じる人間であり、配達人(deliverer)のような存在でした。“deliver”という言葉はもともと、「deliberare=手もとから離れて(de)自由に(liver)」というラテン語に由来するそうです。わたしが『トリニティからトリニティへ』からたしかに受け取ったと思えた言葉を、暗唱して町を練り歩くことで持ち運び、しかるべき場を共有する観客にたしかに手渡そうとする。それもわたしとよく似た個人としてではなく、異なるポジションからまったく別々のパースペクティブで同じ言葉を体験する。そのごく個人的な経験、記憶こそが、このプロジェクトの最も意義深いところだったように感じます。

実際に丸一日をかけて、林さんが人生の長い時間を過ごした場所（逗子市）に足を運び、その土地を散策して回ることは、やはり肉体的にもそれなりの負荷がかかるものでした。わたしと同行人の原はこの日、ずいぶん疲労困憊になって帰途につきました。上演として林さんのテキストを読み上げたことはもちろんですが、この日練り歩いた、林さんと何らかの縁があったかもしれない通りのことや、疲労を伴った長距離の散策そのものも、同時に忘れたいムーブメントとして、わたしたちの記憶に刻まれました。

・・・

その日の経験を、写真と言葉の力を借りてここに残します。映像のような形で部分的に時間を共有するよりも、いっそ私たちとこれを読む人びとのあいだに全く異なる時間が流れた方が正しいような気がするからです。ここにある写真は、わたしたちがそのときに見たり感じたりしたものとはずいぶん異なる時間を捉えています。だからこそ、誰か別の人間がまったく別の時間、別の経験として、このプロジェクトを新しく感じ取ってくれるかもしれないと期待しています。

人間は忘れて生きる存在であり、時の流れは忘却の流れです。今も刻一刻と、1945年8月9日という日から、人類は遠ざかりつつあります。しかし、人間という生き物は、新しい経験を介することで、遠くの他者に触れたり、そのことをいつまでも記憶に留めておこうと意識することができます。この小冊子が、『トリニティからトリニティへ』とまた誰か別の人間とのあいだに新しい経験をもたらし、そしてまた新しい舟ができる原動力になることを願っています。そうすれば少なくとも、その舟に立ち会う人間の孤独の中においては、この本の言葉が、そして「原爆」ということの意味が、なんらかの形でたしかに記憶されることでしょう。

I . Receive

私は、鳴りを静めた荒野に耳を澄ました。

陽にあたためられてはぜる草の実の、

小さいが力強い音が聞きたかった。

蟻地獄を滑り落ちていく虫がたてる、

あがきの砂の音でもよかった。

生きているものがたてる物音を、

私は聞きたかったのである。





私は「グランド・ゼロ」へ向かって歩いていった。

石の碑を取り巻く見学者の、

輪の外まで歩いて、私は立ち止まった。

顔をあげて四方を見た。

一望千里、身の隠しどころのない曠野である。

地面より高いのは人間と、

「トリニティ・サイト」を囲むフェンス、

遠くの地平線に連なる赤い山肌。

その中心点、私の目の前に立つ「グランド・ゼロ」の記念碑だけである。

五十余年前の七月、原子爆弾の閃光はこの一点から、曠野の四方へ走ったのである。

実験の日は朝から、ニューメキシコには珍しい大雨が降っていたという。

実験は豪雨のなかをついて、行われた。

閃光は降りしきる雨を煮えたぎらせ、

白く泡立ちながら荒野を走り、

無防備に立つ山肌を焼き、

空へ舞い上ったのである。

その後の静寂。

攻撃する姿勢をとる間もなく

沈黙を強いられた、荒野のものたち。



大地の底から、赤い山肌をさらした遠い山脈から、褐色の荒野から、
ひたひたと無音の波が寄せてきて、私は身を縮めた。

どんなにか熱かっただろう——。

「トリニティ・サイト」に立つこの時まで、
私は、地上で最初に核の被害を受けたのは、私たち人間だと思っていた。

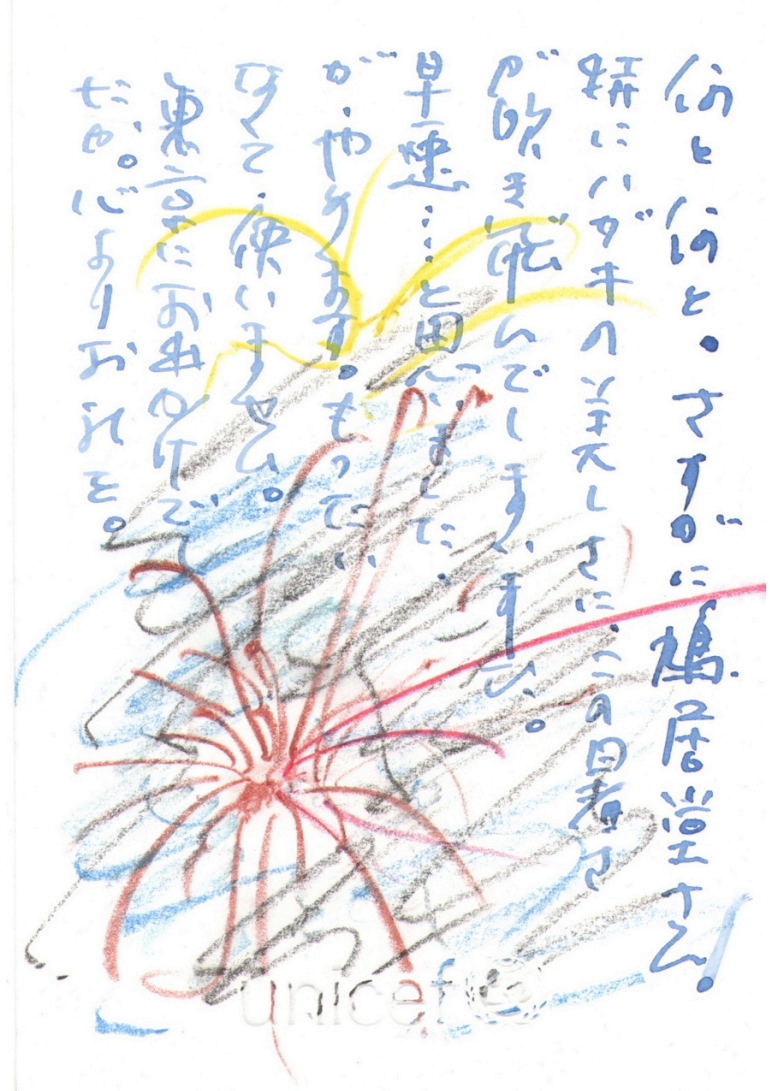
そうではなかった。

被爆者の先輩が、ここにいた。

泣くことも叫ぶこともできないで、ここにいた。

—Final Project 『トリニティからトリニティへ』上演箇所

講談社文芸文庫, 164頁-165頁.



林さんの手書き

鳩居堂のハガキを永子さんが林さんに送った、その返事。

II. Deliver

これは演劇の方法を用いた一日限りのプロジェクトである。

劇場は逗子市立図書館、逗子市桜山5丁目、茅ヶ崎の海浜
の計三箇所。

上演はひとりの俳優とひとりの観客によって行われる。

俳優はその場所のなかに舞台を見つけ、立ち、そして『トリニティからトリニティへ』の
約1頁分の抜粋を暗唱する。

観客は上演の目撃者であるだけでなく、この日の行路すべてをともにする同行者である。

この日の出来事は、写真と言葉によってここに残され、新たな観客へと手渡される。

「身体は景色であり、景色は身体である。」





1930年8月28日 長崎に生まれる

1931年 上海に移住

1945年2月 帰国

1945年5月25日 三菱工場に動員

1945年8月9日 被爆

1951年 結婚

1952年 東京に引っ越す

1953年 男の子を出産

1954年 逗子市新宿に引っ越す

1968年 逗子市沼間に引っ越す

1974年 離婚、群像に応募

1975年 『祭りの場』が群像新人文学賞、芥川賞を受賞

1979年 逗子市桜山に引っ越す

1985年 アメリカへ

1988年 帰国

2000年 『長い時間をかけた人間の経験』

2005年 全集刊行

2017年2月19日 死去



逗子市立図書館

林京子の本が蔵書されている場所



その土地に根を下ろし、生活を営んでいるものにとって、
また、長い時間をかけてその土地とともに暮らした過去のあるものにとって、
その土地の旅行者という存在は、やはり軽蔑に値するだろうか。
軽蔑とまではいかなくとも、滑稽であることは確かだ。

被爆アオギリ 2世

このアオギリは、1945年（昭和20年）8月6日、広島に投下された原子爆弾により、爆心地から東北1.3kmにある旧広島通信局の中庭で被爆し、現在、広島平和記念公園内で成長を続けている親木から生まれた苗木を、2010年（平成22年）に逗子市ピースメッセンジャーが受領したものです。

2014年（平成26年）8月

逗子市





正午をすこし過ぎた時刻。

ひとの住処に足を踏み入れるということ。しぜんと躊躇い、憚られること。

人間の腕くらいにか細い幹が、風に煽られて大きくしなる。





本のカバーを外すと、紙のざらざらした皮膚が手先にじかに伝わってくる。

わたしは、今日行くいくつかの場所を訪れるたびに「林京子」を重ねるだろう。

薄くフィルターがかかるような。

視界だけではなくて、聴く音にも嗅ぐ匂いにも触れる感触にも、あるいは口に入れるものの味にも。ある知らない一人を重ねながら歩く。それはどんな感覚なのだろう。

そして、カメラを通して中尾君を見る。



逗子市桜山5丁目

林京子が住んでいた場所









林京子の自宅近く、そこから山を 300m ほど登って行った先に、桜山中央公園がある。

坂を登っていく途中の景色は、長崎で見た景色とよく似ていた。

わたしの生まれ故郷も、林京子と同じ長崎である。





枝の先から枝の先へと、野生のリスが何匹か、
身軽に飛び移っては忙しなく駆け回っていた。



『トリニティ』には、原爆に対する道徳的な価値観も、被爆経験者としての教訓も書かれてはいない。書かれてあるように感じるのは、圧倒的な距離、遠さ。それはわたしたちの原爆に対する遠さではなく、林京子と原爆の関係に対するわたしたちの遠さということだ。





午後2時半過ぎ。

書かれてある言葉を、すべてこの場に当てがうことは許されないと思った。

当てて読むことと、宛てて読むことはまるで違う。

カメラを持って近づくと、中尾君の身体がより鮮明になった。

本を持っている手や、地面を踏んでいる足、口元、目線と、いろんな場所が魅力的に見えた。

林さんと繋がろうとしている身体、林さんがいたかもしれないその場所と繋がろうとしている身体が確かに見えた気がしたのだ。









茅ヶ崎市

林京子が眠っている場所







國領經郎という画家の展示に立ち寄った。

人間が個性をもった特別な生き物としてではなく、
類的な動物として描かれている、と思った。

女たちのそばを舞う蝶は、公園にいたのと同じ種類だろうか。



午後6時半過ぎ。

茅ヶ崎の海浜。

見渡す限りに相模湾が広がっている。





この前日、わたしは本の最後の頁に記された電話番号にかけ、
編集担当者の方に林京子のお墓の場所を尋ねた。折り返しの電話を受け取ると、
「林さんのお墓というのはなく、茅ヶ崎の海に散骨されたそうです」と伝えられた。

力強く寄せる波は、わたしの息がはこぶ林さんの言葉に、
まるでひとつひとつ返事をしてくれているみたいだった。









この場所で対話が生まれた。そのことは確かな事実だったと、わたしは思いたい。

わたしと、海と、林京子というひと。

そして、それを見た人間がいるという事実は、まぎれもなく確かなことであると。





III.

(Re)Receive



弔う旅

原涼音

前夜。7月7日午前0時52分。

夜が明けたら逗子へ向けて家を出る。

今は、少しドキドキしている。それは恐らく、少し不安だからだと思う。

わたしは林さんを知らない。知っているのは中尾君がこのプロジェクトで使用する林さんの小説のテキストと、少しだけ事前に話してくれた林さんに関する情報くらいだ。

そんな状態で林さんが晩年まで過ごしていた逗子へ実際に赴くということは、なんだか失礼なことなのではないか。何の礼儀も知らない人間がいきなり土足で足を踏み入れるような。いや、今回のプロジェクト自体、どうやって「林さんを知らない人に手渡す」ことができるかという意味を持っているのだから、知らないで行くのは当然のことなのだけど。

「蹴られる」という感覚を恐れているのだ。場に「蹴られる」のではないか。

でも、楽しみでもある。

ただ逗子へ行くというだけではない。「林京子」という自分の知らない人間の住んでいた場所に行く、中尾君というよく知る人と共に。わたしの頭には常に「林京子」がいる。

おそらく、今日行くいくつかの場所を訪れるたびに「林京子」を重ねるだろう。薄くフィルターがかかるような。視界だけではなくて、聴く音にも嗅ぐ匂いにも触れる感触にも、あるいは口に入れるものの味にも。ある知らない一人を重ねながら歩く。それはどんな感覚なのだろう。

そしてカメラを通して中尾君を見る。

林京子 中尾君 逗子 わたし

できる限り、感じたことを記録に残していきたい。

逗子に向かう電車で。

電車の中で、林さんはお墓に入っているのではなく散骨されたいと中尾君から聞いた。

お墓に入りたくなかったのだろうか。

海が好きだった？

本当のことはわたしにはわからない。

憶測でしかない。

逗子。図書館。

まず行ったのは図書館だった。休館日で中には入れなかったけれど、図書館の入り口前にある開けたスペースで中尾君が被爆2世の木を見つけた。その木と上演することになった。

カメラで中尾君の身体や木を記録に残す。でもうまくいかなかった。

一度、中尾君の稽古につき合ったことがあった。このプロジェクトと一緒にやるきっかけとなった稽古だ。その時はテキストを読む中尾君の横、あるいは後ろでテキストをじっくり聞きながらその場にいることができた。しかしわたしは今、そのテキストを覚えているわけでもないし、カメラを扱うのも初心者で正直中尾君の読んでいる言葉を一言一句聞きながら撮るといことは不可能だった。

何を、どう撮ればいいのか？

“いい感じ”に撮っても何も映らない。

わたしは混乱した。

あとで思い返すと、これが行く前に危惧していた「場に蹴られる」感覚だったのだと思う。

一度上演をした後、中尾君に写真を確認してもらった。その時に「木と自分（中尾君）を関係づけるとか、撮影者個人の目線が分かるように撮って欲しい」と言われて、少しわかった気がした。頼るものは、中尾君の身体と、その木と、その場所。それしかわたしにはないのだ。だったらあるものに頼るしかない。そう思ったら少し不安は拭えた気がした。

もう一度、その木から5歩ほど離れた場所で中尾君がテキストを読んで、図書館での上演は終わった。

林さんの自宅近く。公園。

とてもプライベートな場所に足を踏み入れた。それこそ土足で入っていくような感覚だ。でも、その場の強さに「蹴られる」というよりも、林さんという存在が濃くて、林さんと一緒に歩いているような感覚だった。確実にいた場所、きっと何度も林さんが歩いた道、きっと林さんが見たであろう景色。きっと、きっと。それは憶測でしかないけれど、確からしきは強くあった。

自宅近くにある公園で2回目の上演を行った。

中尾君がベンチに座る。本を取り出す。読み始める。わたしは図書館での上演で得た、その場にあるものに頼る感覚を思い出しながらシャッターを切る。

カメラマンとして何の経験もないので、上演をしている身体に近づいて写真を撮るのは勇気のいることだったけれど、もっと近くで撮らなければと思いおそおそと近づいた。すると中尾君の身体がより鮮明になり、本を持っている手や、地面を踏んでいる足、口元、目線と、いろんな場所が魅力的に見えた。その身体自体がただ魅力的なのではなくて、林さんと繋がろうとしている身体、林さんがいたかもしれないその場所と繋がろうとしている身体が確かに見えた気がしたのだ。中尾君はいま、林さんを見ているのかもしれない、触れているのかもしれない。そう思った。それを撮らなければならぬ、と思った。

茅ヶ崎の海。

茅ヶ崎駅から途中美術館へ足を踏み入れながら 20 分ほど歩く。風が強く、波は荒れていた。海は少し緑がかり濁っていた。

中尾君は、波がギリギリ届かないくらいのところで上演することを決めたようだった。傍らには流木が砂浜に立っていた。

「茅ヶ崎の海に散骨されている」

電車で聞いた話を思い出す。波が引いて押し寄せて、を繰り返す。中尾君が読み始める。

中尾君の声は波と風に呼応するように大きくなった。砂浜に裸足で立つ後ろ姿は、容易には近づいてはいけないような、ある種の緊張感のようなものが感じられた。上演の後で、このとき中尾君は林さんと話しているような感覚だったと言った。いま思えば、わたしはその集中力に圧倒されていたのかもしれない。

ここでの撮影も難しかった。

今までの場所には中尾君の身体と繋げるものが明確に、あるいはたくさんあったけれど、海と砂浜が広がるこの場所で、どう一枚を切り取ろうか。広い。この空間全てを撮れたらいいのに、どうあがいてもわたしの見ているものは四角く切り取られてしまう。だからわたしが見るものをできるだけ正しく切り取らなければならない。そんな義務感というか、使命感を感じながらの上演、撮影だった。

そこにあるものを、見る、繋げる、映す。

必死にそれをやった。

中尾君は、最後まで読んだ後に手を合わせた。

一日を終えて。

「弔い」のための上演は終わった。

上演を終えて、私の中は充足感に満ちていた。

この日、逗子と茅ヶ崎に二人で訪れたこと、上演を行い、撮影をしたこと。そのこと自体何か社会の役に立つとか、今いる誰かのためになるとかそんなことは一切ない。だから、傍から見たら自己満足だと思われるのかもしれない。

しかし、それだけでは言い表せない何かが確かに私の体の中にはあるのだ。

林さんの文章、それを読む中尾君の身体、林さんが訪れたかもしれない場所たち、その場所にあった木、草、ベンチ、動物、海、砂浜、流木。たくさんのものを繋げて、繋がって、そうして一日が終わった。

林さんの本を読んだこともない私がこの場所に訪れることで、弔いになったのだろうか。

林さんは受け取ってくれるだろうか。

わからない。

でも、この一日は確かにあったのだ。

確かにあったものだけで、わたしは満足足りている。

林さんに想いを馳せること、それは具体的に言えば、林さんの本を読むことだったり、林さんのいた場所を訪れることだったり、そういうことが弔いになるのだとしたら、わたしはこれからも弔うことを続けていきたいと思う。

もう私の中でただの「林京子」ではない。「林さん」という一人の作家である。



おわりに——「行く」ということの意味

中尾幸志郎

わたしと涼音ちゃんが逗子を訪れたのは七月七日のことで、今この文章を書いているのは七月十日のことです。わずか四日間という短期間で、この小冊子は制作されました。このプロジェクトは六週間あるクラスの最終課題として、最後の一週間に行われたものです。わたしはこのプロジェクトを構成するにあたって、完成度の高いプロジェクトを作品としてつくり上げることよりも、いくつかのコンセプトを通じて確かなプロセスを生むことの方を重視しました。具体的には、逗子へ行ってパフォーマンスをし、何百枚も撮ってきた写真を厳選し、そのとりに確かと思える言葉を書き、林さんのことを全く知らないひとのことも考え、編集し、構成するというのがこのプロジェクト全体のプロセスでした。

ずいぶんと慌ただしいスケジュールのなか、稽古に付き合い、逗子まで同行し、パフォーマンスを撮影し、エッセイまで書いてくれた涼音ちゃんには、本当に感謝しています。なにより、ひとりの観客としてこんなにも多くのことを感じとり、それをこのように書き残してくれたことが嬉しかった。これほどの実感をもって、観客という存在をひとりの人間としてありがたいと思ったことは、これまでの演劇経験のなかでもはじめてのことでした。

演劇をやるにあたって、〈しなくてもよいことをする〉という作り手のたしかな意志はもちろん欠かせないものです。しかし、演劇がほんとうの意味で生まれるのは、観客となる人間が、上演の場に〈いなくてもよいのに〉参加し、俳優が運ぼうとする言葉をしゃかど受け取ろうとする瞬間なのです。わたしは今回のプロジェクトで、実際にひとりの観客（涼音ちゃん）を前にして、自分の身ひとつでなんとか他人の言葉を運ぼうとするので、このことをはじめて実感したような気がします。「観客」という言葉はともすると、人間が2×3に並べられて透明なボックスに詰められたような、そういう無味無臭の概念みたいな印象を与えるものですが、本当はたしかな意志をもった一人ひとりの人間なのです。言葉でそうってしまうことは簡単ですが、これを身体を通して深く理解するには、やはり時間と負荷のかかるプロセスが必要だったのだと感じました。

今回の旅の原動力となったコンセプトは、涼音ちゃんも書いてくれた通り、「とむらう」ということです。「とぶらふ」という古語は、二種類の漢字で表記することができます。ひとつは、死を悼むという意味の「弔ふ」。もうひとつは、その場所を訪ねるという意味の「訪ふ」です。

わたしが逗子を訪ねようと思いついたのは、クラスで触れた三つの作品があったからです。ひとつは実際に逗子で上演した、林京子の『トリニティからトリニティへ』。ふたつ目は、大江健三郎の『ヒロシマノート』。そして、永子さんの“*A Body in Fukushima*”というプロジェクトです。これらの作品に共通しているのは、〈行かなくてもよい場所にわざわざ行く〉ということを通して、生み出されたものだという事です。

その土地にわざわざ行くということは、たいした合理性もないうえに、ずいぶんと効率の悪いことです。文章を書くだけであれば、パソコンが一台あればできてしまうわけだし、演劇やダンスも、稽古場と劇場とそれから何人かの人間が揃えば、作品をつくることができます。それなのに、なぜこの人たちはわざわざ行くということを選んだのでしょうか。それも、一度といわずに何度も。どれほど遠くの土地であったとしても。

わたしがこのプロジェクトを通して感じたのは、「行く」ということは、作品をつくることにおいては別に〈しなくてもよいこと〉であり、それゆえにこそ、突出して人間的な動詞(行為)であるということです。かつて誰かが暮らしていた場所に赴くことは、そこで見る景色に、人間の死や要約しえないものを感じ、それらをじかに肌身にうけることです。それは究極的には、その場の偶然性と人間の必然的な意識とが、一個のからだのなかではげしく複雑に絡み合うということです。そうして得た原動力を、林京子や大江健三郎の場合は、それについてのエッセイを書くことにつなげ、永子さんの場合は、ダンスや写真、それから映像という方法につなげたのです。その意味でこの三者は、プロセスが作品であり、作品がプロセスだといえます。

「身体」と「景色」の関係性も、「行く」ということの意味を通して変容しました。II章の冒頭で書いた、「身体は景色であり、景色は身体である。」というフレーズは、永子さんの言葉です。この言葉の意味が、今回のプロジェクトを通して少しわかったような気がします。涼音ちゃんの撮ってくれた写真には、そこに映る景色の中にふたりの身体が刻み込まれています。写真はたんなる視覚的な切り取りではなく、わたしたちの歩みの痕跡であり、同時に共有された記憶でもあります。また、『トリニティ』を読ん

でいるときの自分の写真は、身体が景色の側に後退し、相対的に景色の側が身体を持ちはじめてるように見えます。そういう特異な時間を、涼音ちゃんはなんとか写真に収めようともがいており、そのもがきの痕跡もやはり景色として、確かにそこに刻み込まれています。

今回のプロジェクトをこのような形で記録したのは、そこに上演があることで誰もが観客になれるのと同じように、そこに写真や言葉があることで、人はなにかを勝手に受け取ることができるのではないかと考えたからです。

受け取り、運び、手渡すこと。人間は所詮、そのつながりのなかでしか生きられない孤独な生き物です。そのようなことをふと思い出すきっかけとして、わたしたちはこの冊子をこうして収めたいと思います。

July, 2020